

それでは、どういうことになりますか。恵みが増し加わるために、私たちは罪の中にとどまるべきでしょうか。絶対にそんなことはありません。罪に対して死んだ私たちが、どうして、なおもその中に生きていられるでしょう。それとも、あなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスにつくバプテスマを受けた私たちはみな、その死にあずかるバプテスマを受けたではありませんか。私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、いのちにあつて新しい歩みをするためです。もし私たちが、キリストにつき合わされて、キリストの死と同じようになっているのなら、必ずキリストの復活とも同じようになるからです。私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだが減びて、私たちがもはやこれからは罪の奴隷でなくなるためであることを、私たちは知っています。死んでしまった者は、罪から解放されているのです。もし私たちがキリストとともに死んだのであれば、キリストとともに生きることにもなる、と信じます。キリストは死者の中からよみがえって、もはや死ぬことはなく、死はもはやキリストを支配しないことを、私たちは知っています。なぜなら、キリストが死なれたのは、ただ一度罪に対して死なれたのであり、キリストが生きておられるのは、神に対して生きておられるのだからです。このように、あなたがたも、自分は罪に対しては死んだ者であり、神に対してはキリスト・イエスにあつて生きた者だと、思いなさい。ですから、あなたがたの死ぬべきからだを罪の支配にゆだねて、その情欲に従ってはいけません。また、あなたがたの手足を不義の器として罪にささげてはいけません。むしろ、死者の中から生かされた者として、あなたがた自身とその手足を義の器として神にささげなさい。というのは、罪はあなたがたを支配することがないからです。なぜなら、あなたがたは律法の下にはなく、恵みの下にあるからです。それではどうなのでしょう。私たちは、律法の下にはなく、恵みの下にあるのだから罪を犯そう、ということになるのでしょうか。絶対にそんなことはありません。あなたがたはこのことを知らないのですか。あなたがたが自分の身をささげて奴隷として服従すれば、その服従する相手の奴隷であつて、あるいは罪の奴隷となつて死に至り、あるいは従順の奴隷となつて義に至るのです。神に感謝すべきことには、あなたがたは、もとは罪の奴隷でしたが、伝えられた教えの規準に心から服従し、罪から解放されて、義の奴隷となつたのです。あなたがたにある肉の弱さのために、私は人間的な言い方をしています。あなたがたは、以前は自分の手足を汚れと不法の奴隷としてささげて、不法に進みましたが、今は、その手足を義の奴隷としてささげて、聖潔に進みなさい。罪の奴隷であつた時は、あなたがたは義については、自由にふるまっていました。その当時、今ではあなたがたが恥じているそのようなものから、何か良い実を得たでしょうか。それらのものの行き着く所は死です。しかし今は、罪から解放されて神の奴隷となり、聖潔に至る実を得たのです。その行き着く所は永遠のいのちです。罪から来る報酬は死です。しかし、神の下さる賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちです。

パウロの神学的強調点は「恵みに対する信仰です。」「あなた方が救われたのは、恵みにより、また信仰によるのです。」ということばはすべてのクリスチャンは覚えていることばです。ところが、恵みによる救いというものは、誤解をまねきやすい概念でもありません。

「恩寵主義」という神学用語があります。聞こえは良いのですが、その主張は間違っています。彼らは「恵みによって救われるのだから、罪を犯してもよいではないか。いや、むしろ罪を犯せば犯すほど、恵みを経験できる。」と言うのです。

ちょうど、パウロが胸を張って、「罪の増し加わる所には恵みも満ちあふれた」と恵みの素晴らしさを誇ります。「罪が高くても恵みはもっと高い。罪が広ければ恵みはもっと広い、罪が大きければ恵みはもっと大きい。罪が深ければ恵みはもっと深い。罪が増せば、恵みはもっと増すのだ。」と語りましたが、確かにこれは誤解されやすいことばです。

彼のことばを利用して「恵みが増すために、もっと罪を犯せばいいではないか。」と、パウロの教えをひっくり返ししてしまうのです。

また、「あなたがたは恵みの支配を受けているのです。恵みによって支配されているのです」とパウロは語りましたが、「では、何やったって、恵みの支配の中にあるのか」「それでは、罪を犯そうか」と誤解をした人たちもいたわけですから。

それに対してパウロが答えているのが6章です。

1～7節「それでは、どういうことになりますか。恵みが増し加わるために、私たちは罪の中にとどまるべきでしょうか。絶対にそんなことはありません。」とパウロは誤解を正しています。「罪に対して死んだ私たちが、どうして、なおもその中に生きていられるでしょう。それとも、あなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスにつくバプテスマを受けた私たちはみな、その死にあずかるバプテスマを受けたではありませんか。私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、いのちにあって新しい歩みをするためです。もし私たちが、キリストにつき合わされて、キリストの死と同じようになっているのなら、必ずキリストの復活とも同じようになるからです。私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだが減びて、私たちがもはやこれからは罪の奴隷でなくなるためであることを、私たちは知っています。死んでしまった者は、罪から解放されているのです。」というのが、パウロの答えだったのです。

2 バプテスマを受けて、キリストと一つに

バプテスマ、日本語で「洗礼」ですが、私が洗礼を受けたのは15歳の時でした。柴又にある教会ですが、人家を借りて、その2階で牧師夫妻が生活していて、1階で教会活動を行い、35人の礼拝出席者がありました。

洗礼槽がなかったので、洗礼式はほとんど滴礼でした。それでも江戸川が近いから、春、夏は江戸川に行って洗礼式をします。その時は、私を含めて3名くらいの者が洗礼を受けるために、礼拝が終わってからお昼を食べて、15分くらい歩いて江戸川に行きました。水がいっぱい溢れている、大きな、すばらしい川ですが、洗礼スポットになる浅瀬があって、そこで洗礼式をしていただいたのです。

当時、私は歳も若く、信じたばかりで、洗礼の意味はよくわかりませんでした。牧師は説明してくれたと思いますが、私としては「信仰を持ったのだから、洗礼を受けるのだろう」という程度の理解にすぎませんでした。

パウロはここで、洗礼の意味を説明しています。基本的に、洗礼を受ける、バプテスマを受けるというのは、キリストと一つになる。一体になるのだということです。

パウロは、色々な前置詞を使って、そのことを説明しています。3節「キリスト・イエスにつく」イエス様を信じるということは、キリスト・イエスにつくのだ、つながるのだということですね。「私たちは皆、その死にあずかるバプテスマを受けたのではありませんか。」私たちはその死にあずかってしまうのだ。4~5節「私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、いのちにあつて新しい歩みをするためです。もし私たちが、キリストにつき合わされて、キリストの死と同じようになっているのなら、」これはすごい表現ですね。私たちはキリストにつき合わされている。そしてキリストの死と同じようになるなら、「必ずキリストの復活とも同じようになるからです。」と書いてあります。

ここにおいて語られているイメージは、バプテスマによって私たちはキリストと一体となるのだ。私たちはキリストの死と再生の出来事にあずかる。つまり、私達も死と生を体験するのだ。心理学用語では再生と言うことばが使われますが、聖書の中では復活ということばが使われます。私たちはキリストとともに死と復活を体験して、キリストと一つになってしまうのだということです。

3 三重の福音 ①キリストとともに死ぬ

これは三重になっています。

第一に、その死にあずかること。キリストとともに死ぬということです。パウロは、これが福音だと思ったのです。あの古いパウロ、古い人が死んでしまうことほどすばらしいことはない。

パウロは優秀な人で、律法熱心であった。社会的によい地位を得て、成功のエリートコースをどんどん歩んでいたのに、内面的には大混乱で、分裂状態にあったのです。激しい

怒りがありました。神に対して敵対心があったのです。律法を行えば、行うほど人をさばくようになり、クリスチャンを捕えて、牢に入れ、ある者を殺してというような怒りが一杯で、最後には、「ああ、私は本当にみじめな人間です」（ローマ7:24）と告白するようになるのです。

そのようなパウロにとって、自分が大嫌いで自己嫌悪している人間、内側が大混乱している人間、その自分が死んでしまうことは、素晴らしい福音だったのです。あの人間は、「少し良くなった」とか、「徐々に良くなるのだ」とか、「これから良くなるのだ」とかいうのではなくて、あいつは「死んでしまった」、「おしまいだ」というのです。これは素晴らしいことです。

死んでしまった者は罪から解放されています。たとえば、殺人犯が明日法廷で裁判を受けて、恐らく終身刑か死刑を言い渡される前日に、食中毒でおなかをこわして死んでしまったら、だれもその死体を法廷に持って行って、さばく人はいません。死んでしまったら、それでおしまいである。あの古いパウロは死んでしまったから、罪から解放されているのです。古い人が死んでしまったのに、どうして、その罪の中にとどまることができるだろうか、とパウロは言っているのです。

4 三重の福音 ②キリストとともに葬られた

第二番目に、「葬られた」ということです。埋葬というのは、この人は本当に、本当に、本当に死んだのだという儀式です。

私は多くの葬儀をしてきましたが、アメリカンにおいてはほとんどが土葬です。棺（木でできたものではなく、決して水分、湿気が入らないようにつくられた、しっかりした、頑丈なもので、だいたい12のねじがあって、それをぎゅうぎゅうと締めて、一切の湿気が中に入らないように密封される）を3~4メートル掘った穴に入れて、皆さんがそこに花を投げたりするのですが、それを土で覆ってしまいます。

イエス様の時代、土葬もありましたが、多くの者はほら穴に納められました。くり抜かれた岩の中に入れられたのです。今日イスラエルに行くならば、お墓には数種類あるのですが、エルサレムで目立つのは石でできた墓です。遺体を入れて、そのお墓をうずめない。地面の上に出ているのです。イスラエルは小さな国で、エルサレム市内の土地は高価なので、だいたい丘や山が多いところですから、その斜面を好んでお墓にしています。

興味深いことは、イスラエルにおいて、これは笑い話でも冗談でもなく、本当のことですが、彼らはエルサレムに足を向けて葬られるのです。ユダヤ教徒たちは、まだメシヤは来てないと考えているので、メシヤが来た時には、からだが甦って起きることになる。その時に、からだ起きあがったときに自動的にメシヤに向かうように、足をエルサレムに向けて埋葬するのです。

私にとって最も強烈なのは、火葬です。アメリカでは火葬に慣れてはいませんでしたから、日本に来て火葬を見た時、非常にショックでした。いかに死んだとはいえ、葬儀屋さ

んが顔やからだをきれいに着飾ってくれるので、あたかも生きていらっしやるのではないかと思うのです。しかも、最近是非常によくケアしてくれて、遺体が長い間保つようになっています。ところが、炉の中に入れられると、1時間経てば骨と灰になってしまいます。遺骨を見た時はショックでした。もう疑いなく、この人は死んだと思わざるを得ません。

バイキング達は水葬というのをしました。遺体を小舟、木の船に乗せて、そこに藁とか、木をつめて、沖に出して火をつけて水葬にするのですが、結局、藁も、船も燃えて、遺体が海の中に沈んでいく。

バプテスマというのは、一種の水葬です。水の中に全部沈めるのです。私の洗礼は川でしたから、川の中につけられたのです。

私は牧師として、バプテスマを授けるときは、5分以上は水の中にとどめないようにしています。その前を出して起こしてあげようと。でも、本当に死んだということを実感していただくためには、しばらく水の中においておいた方がいいかなって思ったりしますが。

北川晋兄の洗礼式は、サンタバーバラの海でしました。聖書的に海の洗礼は勧められませんが、あの時は本当に危なかった。ちょっと気候が悪かったので、波にさらわれてしまいました。サンタバーバラはいつも真青で静かな海なのに、その日は荒れていて、短い旅行中なので、今ここでやらなければと思いましたが、少し間違ったら殺してしまったかもしれませぬ。そんなことですが、殺してはまずいのです。これは象徴的に、靈的に、儀式的に、この人は死んだという儀式ですから。

つまり、バプテスマは、葬儀であって、この人の古い人は死んだのだということなのです。

5 三重の福音 ③キリストとともによみがえった

そして、「キリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、いのちにあって新しい歩みをする」のですね。

6 バプテスマは接ぎ木のイメージ

日本では、アメリカのワインはあまり高く評価されていないと思います。何となくヨーロッパのワインの方が高級というイメージですね。ヨーロッパでは、もう何千年というワインづくりの文化がありますが、アメリカではたった120年ですから。しかし、ワイン・コンテストをすると、カリフォルニア・ワインが勝ってしまうことが多いのです。値段は安いのですが、どれがおいしいかコンテストをするとカリフォルニア・ワインが選ばれる。ナッパバレーとか、西海岸の沿岸に多くのブドウ園が点在しているのです。

アメリカがどうして、120年くらいでヨーロッパのワイン作りに追いついたかということ、カリフォルニア大学バークレー校が参与しています。カリフォルニア大学の14校中で、最もレベルが高いのがバークレーと言われていて、その農学部はアメリカと言われてい

ます。そのパークレー大学が研究と指導をして、ナッパバレーで接ぎ木をさせ、繰り返し、繰り返し、接ぎ木をさせて、おいしいワインをつくってしまったのです。ですから、短期間で何千年も歴史のあるヨーロッパに対抗できるようになってしまったというわけです。

私達も、実をいうと、野生のオリーブの枝だったにもかかわらず、キリストに接ぎ木されて、今度はキリストからいのちの養分を受けるようになりました。その結果、ユダヤ人のように長い間唯一の神を信じて、聖書を信じて、唯一のまことの神を礼拝して、律法を守ってきた人達を、ある面でぬかすことになったのです。それは、私たちはキリストに接ぎ木されたからです。

バプテスマということ、或いは、イエス・キリストを信じるということは、接ぎ木されることなのです。キリストに接ぎ木されたから、私たちは罪から解放されているだけではなく、キリストとともに、キリストのために生きるようになったということです。

7 死んで罪から解放されて

7節を見ていただくと、そこに「死んでしまった者は罪から解放されている」と書いてあります。

三重の福音の第一番目は、私たちはキリストとともに死んだのでしたね。

エルサレムに行くと、伝統的な聖墳墓教会を必ず訪問します。それはイエス・キリストがなくなられた場所、葬られた場所、よみがえった場所を覆うように教会堂を建てて、「イエス様が十字架にかかれた場所、葬られた場所つまりよみがえった場所」と記念しているのです。

また、園の墓と呼ばれる所があります。そこもイエス様がそこに納められ、そして、そこでよみがえったのではないかという場所です。

かなり大きな公園なので、集会場が7つか8つあって、そこで礼拝をして、聖餐式をするのがパターンになっています。ベンチに腰掛けると向こう側に岩山があって、その山の斜面はされこうべの形をしています。そこも、イエス・キリストが十字架にかけられた場所ではないかと言われます。

どちらが歴史的に正しいかという議論はしませんが、私はイメージ的に、されこうべの顔をした岩、丘を見て、あそこでイエス様が十字架につけられた実感がわきます。

その小高い丘を見つめながら、実は、平野耕一という人間も、あそこで死んだのだ。2000年前、私はキリストとともに十字架につけられたのだということを思い出します。

パウロはそう言いました。「私はキリストとともに十字架につけられました。生きているのは、もはや私ではなく、キリストが私とともに生きているのです。今、私がこの世に生きているのは、私を愛し、私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によるのです。」(ガラテヤ2:20) そう、私は死んだのだ。そしてキリストが私のうちに生きているのだと、私はそこで確認する。エルサレムに行くたびにそこに行って、ああ、あそこで私は死んだのだと確認して来るのです。

7節「死んでしまった者は、罪から解放されているのです。もし私たちがキリストとともに死んだのであれば、キリストとともに生きることにもなる、と信じます。死んでしまった者は、罪から解放されているのです。もし私たちがキリストとともに死んだのであれば、キリストとともに生きることにもなる、と信じます。」そうです。今や、キリストとともに生きる者となったのです。

10～11節「なぜなら、キリストが死なれたのは、ただ一度罪に対して死なれたのであり、キリストが生きておられるのは、神に対して生きておられるのだからです。このように、あなたがたも、自分は罪に対しては死んだ者であり、神に対してはキリスト・イエスにあって生きた者だと、思いなさい。なぜなら、キリストが死なれたのは、ただ一度罪に対して死なれたのであり、キリストが生きておられるのは、神に対して生きておられるのだからです。このように、あなたがたも、自分は罪に対しては死んだ者であり、神に対してはキリスト・イエスにあって生きた者だと、思いなさい。」

8 情欲に従ってはならない。

「神のために生きるようになる」。それは実際、具体的にどういうことか。12節「ですから、あなたがたの死ぬべきからだを罪の支配にゆだねて、その情欲に従ってはいけません。また、あなたがたの手足を不義の器として罪にささげてはいけません。むしろ、死者の中から生かされた者として、あなたがた自身とその手足を義の器として神にささげなさい。」ここに情欲ということばがあります。パウロは罪、罪と言っていますが、基本的にはパウロが考えていた罪とは、情欲のことでした。

ローマ人への手紙を勉強しながら、聖書、注解書、その他のものを調べます。色々な情報を調べ、色々な所から情報を得ていますが、ローマ時代の情欲、性的な混乱、放縦は、今日のプレイボーイをはるかに超えるものでした。今日、東京とか、ロサンゼルスとか、サンフランシスコ、ニューヨークでも見られないようなスケールの放縦が、ローマにおいてごく普通に行われていたのは驚くほどです。

皇帝アウグストが全世界の人口調査をせよという命令を出したので、両親がナザレからベツレヘムに行ってイエス様が生まれたことが聖書に書いてありますが、そのアウグストは、「ローマがこのような弱体化してしまったのは、性的な乱れ、性的な放縦によるのだ」と言って、貴族と軍人に、「妻以外の者と性的な行為をしてはいけない」と命じたのです。そして非常に厳しい取り締まりをしました。どれほど厳しかったかというと、その皇帝にそむいて、公けに性的な放縦を尽くしたのは、実は孫娘だったのです。アウグストはその孫娘を流刑にし、その相手も別の島に流刑にし、彼らが死ぬまでローマに連れ戻す事を許さなかった。

その当時は、今日のポルノ本以上のポルノ本が出ていたらしく、こと細かに性的な描写がなされ、体位とかも細かに描かれて、ローマ人が全部読んだ。一応アウグストは、貴族

や軍人に対しては、そのような命令を出したのですが、一般市民を取り締まる事はできない。ですから一般市民は性的に放縱のままであった。

しかも、アウグストが皇帝を降りた途端に、貴族の中にもまた性の反乱が起こってくるし、誰よりも皇帝が率先してそうになっていった。歴史家のトインビーは、ローマ帝国は北のゴート族に滅ぼされたのではなく、内面から崩壊していったのだと言いました。それは性的な放縱、情欲のためだと言われています。

当時、奴隷といっても、性的な相手をするための奴隷がいて、美しく、高価であった。そういう奴隷を何人も持っているのが普通であった。ローマ社会は男中心の世界で、男が権威を奮う場所だったのですが、女性だけではなく、若い少年のような男達も相手にされて、そうしたことが批判されたり、とがめられることは一切なかった。一人の人が5人のセックスパートナーを持つのはごく普通であったというのです。

ローマでは、八人の女性がいれば、一人は娼婦だった。そして、一杯のワインくらいの代金で、娼婦を買えたというのです。それが、パウロが伝道した時のローマだったのです。

12～13節そういうバックグラウンドの中で、「ですから、あなたがたの死ぬべきからだを罪の支配にゆだねて情欲に従ってはなりません。また、あなたがたの手足を不義の器として罪にささげてはなりません。むしろ、死者の中から生かされた者として、あなたがた自身とその手足を義の器として神にささげなさい」と、そうすれば、情欲があなたを支配する事がないからだとパウロは言っているのです。

今日の日本では、アメリカでもそうですが、高校生くらいの頃から、複数の相手とセックスをするのはごく普通みたいなところがあったり、簡単に同棲したりしながら、それが悪いこととは思われていないし、罪とも感じられず、人々は罪意識を持っていない。ごく普通のことのようです。

「だって、みんなやってるし」。そういう方がクリスチャンになると、そういうことを正直に話されます。ある面において、そういうことを素直に話せるっていいと思います。そういうことを話すのはとても恥ずかしいのが私の若き日でしたが、今の若い人達は、「私、同棲していました」とか、「何人かの人とこういうことがありました」とか平気で言う。それはそれで正直でいい。そういうことに関して罪意識を持っていないことも、決して悪いことではないと私は思います。

でも、クリスチャンになってから、「そういう生活をするものではありませんよ」と教えるのはとても難しいのです。「罪だからやめなさい」と言うと、また律法になってしまいますものね。

パウロはそれを説明するのに、「罪だからやめなさい」とは言わないで、「あなたはキリストとともに死んで、キリストとともによみがえって、キリストのいのちを受けているから、あなたのからだは今まで不義の器として、手足を不義の器として使っていたけれど、これからは義の器として使うんだよ。

神様はあなたのからだを義の器として使ってくれるのだから、あなたのからだをささげてください。そうしたら、今までのように罪とか情欲にささげたり、罪や情欲に振り回されることもなく、今度はこのからだを神様の役に立ち、神様の栄光を現わすことができる。すごいだろう。すばらしいだろう」、こういうふうにして、彼は恵みの中で、情欲への対処も説明していたのです。すごいな、パウロは。そう思うのです。

9 義の器として

義の器と書いてあります。

先日、この会堂の3周年記念をいたしました。この3年間、今は小田原に引っ越ししてしまつた井村さんなど、毎土曜日、4~5人の方が、3時間くらいかけて、教会全部をお掃除してくれるのです。基本的に一度も休まないようにしてやってくれています。当然、掃除には手足を使うのですから、何と、その手足は義の器となっているのかなということですね。

教会の長老さんが、町田ではお昼ごはんを作っています。しかも、過去7年間、毎日曜日、ほとんど休まないで、せっせ、せっせと、一食300円の食事を60人~70人のためにつくっています。水曜日に買い出しに行つて、あるものについては土曜日にまた買い出しに行つて、土曜日に教会に来て、日曜日は朝早く、第一礼拝の前に下準備をして、第一礼拝に出て、それから一生懸命料理してということをして、7年間くらいやっているのです。一人の男性です。料理するというのも、このようにクリスチャンのため、神様のためにと、彼の手足は神様の手足になって、神様の栄光を現わすために使われているのです。

楽器を弾くためには、手足、特に手を使います。歌うということは、このからだを一種の楽器として使うのです。からだを神様をほめたたえる。からだがないと音楽をすることはできないし、神様をほめたたえることができない。

私の場合は、このように聖書を語ることで主に奉仕をしていますが、昨日の夜は3時ころ帰ってきました。名古屋から運転してくれる人がいるのです。これも手足を使って奉仕をしているわけですね。パソコンをたたくのも、やはり手が使われるでしょうし、文字を書く人、文章を書く人、トラクトを配布する人、色々な奉仕がある。CDをつくつたり、DVDをつくつたりする人達もいるし、全部、からだを器としてささげられて、神様の栄光を現わしている。そのような器として手足が使われている。それが用いられるということなのです。

10 召しによって救われる

このようにして、イエス様を信じて、永遠のいのちをいただいて、天国に行けるといふたましいの救いがあり、それはすばらしいことです。その裏には、同時に、神様の召しがあるのです。神様の召しというと、おおげさですが、神への奉仕というものが、霊的な救

いと表裏一体になっているのです。実に、私たちはイエス様の十字架の血によって救われるのですが、ある意味、奉仕することによって救われる世界もある。

このような表現はあまり使われませんが、「神様の召しによって救われた」ということばが、私にとってはぴったりののです。たとえば、パウロがイエス様と出会って救いを得た時に、神様から召しを受けています。「異邦人の使徒となるのだ」と。救いと召しが、同時に起こっているのです。パウロという人は、最も偉大な使徒であり、この2000年間の歴史の中で最も偉大な人物なので、パウロの話を出すと大げさになってしまいますが、牧師になるとか、伝道者になるということではなくても、もっともっと身近な現実の中で、一人一人神様から召しをいただいていると思うのです。

カトリック教会において、召しをいただいているのは神父様ですが、プロテスタント教会では、ルーテルは「すべての職業は神の召しによって行うものであり、すべての奉仕は神様から召されてやるものだ」と教えました。私たちクリスチャンは皆、神様から召しをいただいている。説教するだけでなく、牧師・神父様になるだけでなく、すべて私たちは神様からの召しをいただいて、神様に仕えているのだということです。

私がクリスチャンになったときは、15歳でしたが、礼拝出席者が35人くらいの小さな教会でしたから、「平野さん、何か手伝ってください」「路傍伝道を手伝ってください」「教会学校を手伝ってください」と言われ、「いいよ」と言って手伝い始めた。そうこうするうちに、「教会学校の先生が、来週出張で来られないんだ。平野さん、日曜学校に生徒にお話しをしてくれる？」というところから始まって、子どもの前で話を始めた。だいたいそれが3年間続いて、そうこうしているうちに私にもクラス、3～4年生でしょうか、が与えられて、毎週子どもの前でお話しをするようになったのです。

私は小学校で全然勉強ができなくて、頭が悪いと思ったし、母もそう思ったし、学校の先生にもずっと悪いと思われていたのです。スポーツも音楽もよくできないし、アートなんか全くできない子どもでした。しかし何と、子どもとお話することだけはできた。面白かった。楽しかった。子どものケアに夢中になったのです。そうやって私は、3年間の信徒時代に一生懸命日曜学校で奉仕をしました。その当時は、子ども達がごそごそ教会に来て、大人は35人くらいなのに、子どもだけは100人近く来るような時代だったのです。「子どもは日曜学校に行こうよ」みたいなイメージがあったのです。

アメリカに行った時、セントポール・ユナイテッド・メソジストチャーチというメソジスト教会で、「お前を子どものミニストリーの為に雇う」ということになりました。私を助けたいと思ったのでしょうか。給料を払って、パートタイムの仕事をくれたのです。アメリカの教会ですから、子どもが多いので、私はしょっちゅう子どもたちと遊んでいました。その姿を見た孤児院の経営者が、アクティビティ・ディレクターとして雇ってくれたのです。敷地が何万坪もあって、畑があって、農夫たちが敷地に住んでいて、馬が飼われ、孤児たちが馬に乗れるようになっていて、大きなジムがあってバスケットボールができて、それから野球やソフトボールができて、プールがあって、私はそこで部屋を与えられ、子

どもたちと一緒に遊びながら、勉強を教えるみたいなことをして2年間、祝福された生活を送ったのですが、その発端を振り返ると、全部あれは日本で子どもたちの面倒を見ていたことから発展したことなのです。子どもたちの扱いがよく、子どもが大好きということで、子どもミニストリーや、孤児院で働くことができたので、私はアメリカで生き延びることができたのです。

私が英語を教わったのは孤児からでした。大人の人と話すのって、恥ずかしい。間違いたくない。でも孤児たちとなら平気で話せた。失敗すると子どもたちがどっと笑うものですから、「間違ったことを言ったな」と思って「何か僕言った？」と聞くと「こうだよ、こうだよ」と教えてくれたのです。孤児院で私は英会話を覚えたのです。

ですから、教会で奉仕することが私を救ったという面があると思うのです。そうこうするうちに、子どもだけでなく、中高生へのミニストリーができるようになり、学生、大人もできるようになっていきました。実際、このようなお付き合いがないと、神学校の勉強だけでは、牧師にはなれないですよ。

結婚してからも子どものミニストリーは継続して、いつもぞろぞろ、ぞろぞろと子どもがついてきていたのですが、妻が子どものクワイヤの指揮をして、私が一人のアメリカ人女性とクワイヤの中で歌って、プログラムをして、有名になってしまい、あちらこちらの場所に呼ばれ、バスに乗っては演奏して歩いたことがあります。

PTLクラブというのがノースカロライナのシャーロットにありましたが、そこから呼ばれて、テレビに出演招かれたこともあります。全部、私が高校生の時に日曜学校で奉仕したことが、実を結んだことなのです。

「平野先生のお話は、とてもわかりやすいのですが、それはどこで勉強したのですか。どこの神学校ですか」と聞かれますが、神学校で勉強したのではなくて、高校生の時に、子どもたちが分かるように聖書をお話ししていたからです。小学生に話すように話しているから、わかりやすいはずなのです。ですから、教会の奉仕は私を非常に豊かにした。あるいは救ったということができると思います。

自分の人生、神様の召しを頂いて、奉仕をいただいて救われた。私は、神のためにどれだけやったか、或いは人々にどれだけ尽くしたか、そういうことはわからないのですが、それが私のためにどんなによいことになったかは、はっきりわかっています。私は今まで、いつも充実感を持っていて、自分がやるべきことはこれなのだとはっきりわかって生きて来ました。

11 天命

「賜物に気づく、幸福に気づく」という本のタイトルは、編集者の櫻井さんがつけたものです。非常に優秀な編集者で、「平野先生が召しとか、使命とか書いているのは、巷では『天命』ということばですから、それを使ったらいいですよ」と教えてくれました。「クリスチャンでない人、信仰を持っていない人も（櫻井編集者もクリスチャンではありません

んが)、皆、天命を知りたいと思っているんです。何か、超自然的なお告げというか、自分はこれだというのを知りたいと思っているのです」ということで、本の中では「天命」ということばを使いました。

それは、聖書の用語では、召しとか、召命とか、使命とかいうことばです。私は確信します。あなたが、あなたの召しを捜し、それを追求したら、あなたは救われます。天国に行くという意味の救いもありますが、充実した人生を送るという意味での救いです。神様からの召しに生きてら、それは救いです。神様がやれということをやっているのだから、やっていることは間違いなく、「あたり」ですよ。そして私らしき、自分らしきというものが現われてくるのですから。

私はもともと、人好きで、寂しがり屋なのです。名古屋に行って、昨日帰ってきたのですが、「大変ですね、平野先生、名古屋に行って、帰って来て、今度は家庭集会があつて」と言われます。でも、車の中って楽しいんですよ。5人くらいで行くのですが、その中のおしゃべりは、私にとってはとても楽しいのです。「苦しそうで、大変ですね」と言われても、本当は大変ではない。人々に囲まれて生きるのは、私に合っているのです。

12 召しによって賜物が開花して

それから、私の賜物が召しによって開花されたということではないかと思います。日本の文化では、お話しするチャンスなど、ほとんどありません。お話しをするような所は、恐らく教会しかないでしょう。まして、高校生が子どもたちにお話しするチャンスなど、日本では与えられるはずがないのですが、私にはそういうチャンスが与えられた。話をするのが自分の賜物だと思ったのは50歳くらいからで、何も知らないでやってきたのですが、まさしくこれが私の賜物でした。

アメリカでは、想像できないようなことができるようになってしまいました。白人の教会で、英語で説教することです。まさか、こんなことができるようになるとは思いませんでしたが、神様の召しに従って行った結果、できるようになった。もし神様の召しに従わなかったら、ずっと一生の間、私の中にうずもれて、決して顔を出さないような賜物だったでしょう。召しに従った時に、神様はそれを引き出して使ってくれたのです。

13 召しがすばらしい出会いをもたらす

召しに従って、多くのすばらしい人々との出会いが起きました。神様の召しに従わなければ、出会うことは決してなかった人々が数えきれないくらいいるのです。

今日も、十数年前にお会いした姉妹に、このようにしてお会いしています。サンディエゴのホーリネス教会の大川道夫先生が、キャンプの講師として何回かお招きくださった時にお会いしたのだらうと思いますが、その姉妹が礼拝に参加してくださっているのです。

フルダ先生という方が、月一度、朝の祈祷会に来てくださいます。そのお姉さんに名古屋で会ったことがきっかけです。フルダ先生は名古屋が出身です。お姉さんは芸大で音楽

を勉強した方ですが、「妹は変わった子でね。小学生の頃、聖書を一生懸命読んで、わからないと牧師先生に質問する。ある時『聖霊の賜物って何ですか』って聞いたんです。小学生なのに。その頃の牧師は聖霊の賜物なんてほとんど知らないですよ。日本キリスト教団の教会の立派な牧師でしたが、『何だろうね、調べておくから』と言って、調べて、『聖霊の賜物とはこういうものだよ』と言ったら、『それではどうしてうちの教会では使わないんですか』と言ったのです」というお話です。

フルダ先生は医者になるために東京の大学に出て来ましたが、結婚されて、ご主人のお仕事の関係でロンドンに行って、方向転換してバイブルカレッジに行きました。その知識の膨大な事に驚いて、「ホライズンの小さなバイブルカレッジで教えてくれるといいんですが」、と聞いてみたら、教えに来てくれて、過去の2年半くらい、全く無料で教えて下さっているのです。

この人は、イザヤ書とか、エゼキエル書、ダニエル書の本をぱっぱと平気で書いてしまいます。すごい聖書の知識を持った人ですね。「エゼキエル書ダニエル書」とか、「イザヤ書ゼカリヤ書」など100冊も献品してくれて、「これを売って教会の伝道のために使ってください」と言ってくださった。1800円の本だから、著者割引が2割にしても、決して安いものではありませんが、ぼんとプレゼントしてくださったのです。

彼女が6ヶ月くらい前でしょうか、「平野先生の賜物は」みたいな話をし始めました。「優秀な人がまわりに集まることです」と言われました。そんなことは考えたことがなかったのですが、皆さんは優秀な人だと思われているのです。確かにそうかもしれません。フルダ先生のような人とちょっと出会って、こんな小さな聖書学校で教えてくれて、私を愛してくださっている。

渡部牧師は私よりもはるかに優秀な人ですが、31年間一緒に働いてきて、私の害になることは何一つしたことがなく、絶えず、私の益のために働いてくださっています。よく「平野先生、きれいなネクタイしていますね」と言われますが、これは全部、渡部先生が買ったもので、プレゼントなのです。渡部先生から買ってもらうと嬉しい。本当に忠節な人です。

アメリカでもどんなに多くのすばらしい人に出会っただろうか。召しに従ったときに、こういう出会いがものすごく多く起こってきたわけです。

14 召しは夢中になるものを与えた

そしてこの召しというものが、夢中になるものを私に与えた。私はアメリカでフルタイムで働いて、フルタイムで学生をやっていましたが、アメリカの学生はよく勉強するので、大変でした。仕事しないといけなかったので、仕事もしましたから、一日3時間しか眠れないようなことがしばしばありました。それでも、頑張ったとか、苦労したというような思い出はなくて、夢中だった。楽しかった。本当によかった。そういうイメージしか湧いてこないのです。

神様の召しに従うということが、私を救ったのです。天国に行くという救いもあるけれど、充実した、喜びの多い人生を生きるという点では、神様の召しが私を救ったのだ。神様の召しは、私を救うものなのだと思います。

私は本を書くなんて、余程頭のいい人でなければできないと思っていました。そして、願わくは一生に一冊くらい本を出せたら素晴らしいと思っていたのですが、すでに 20 冊近い本が出版されました。神様の召しに従わなかったら、こういうことも絶対起こらなかったでしょう。神様の召しに従うことって本当に素晴らしいなと思います。

15 奴隷になれば自由

ところで、アメリカの教会で奉仕して、アメリカ人が私のことをどう言ったかというところ、「こんな自由な人は見たことがない」。アメリカ人は自由だと思ったのですが、彼らは「Koichi ほど自由な人間はいない」と言いました。

パウロはここにおいて、大いなる逆説を話しています。それは何かというと、「奴隷になったら、自由になるのだ」、ということです。「自分のからだを義の器として神様にささげてしまったら、あなたは自由になれるのだ」と彼は言っているのです。ですから、16 節「あなたがたはこのことを知らないのですか。あなたがたが自分の身をささげて奴隷として服従すれば、その服従する相手の奴隷であって、」情欲に身をささげれば、情欲の奴隷になるのですね。「あるいは罪の奴隷となって死に至り、あるいは従順の奴隷となって義に至るのです。」

からだがよい、悪いではありません。このからだは何のためにささげられるかが問題なのです。情欲にささげられるなら、このからだは情欲の奴隷になるし、神にささげるならば、何と義の器になってしまう。

17～21 節「神に感謝すべきことには、あなたがたは、もとは罪の奴隷でしたが、伝えられた教えの規準に心から服従し、罪から解放されて、義の奴隷となったのです。あなたがたにある肉の弱さのために、私は人間的な言い方をしています。あなたがたは、以前は自分の手足を汚れと不法の奴隷としてささげて、不法に進みましたが、今は、その手足を義の奴隷としてささげて、聖潔に進みなさい。罪の奴隷であった時は、あなたがたは義については、自由にふるまっていました。その当時、今ではあなたがたが恥じているそのようなものから、何か良い実を得たでしょうか。それらのものの行き着く所は死です。」

ローマ人の性的な放縦についてももう少しお話するならば、自分の家の中で裸の男女がからみあったり、老年の男性と少年がからみあったり、複数の男性と女性がからみあっているような大きな絵を、子どもや青年が生活するリビングルームに飾っていたのです。玄関にさえも、そういうものが飾ってあった。公衆浴場、ローマ人はお風呂が好きで、巨大な公衆浴場があったのですが、そういう場所にも飾った。いわゆる公の場所ですら、そういうものが飾られていたのです。ポンペイというのは今日のラスベガスですが、火山灰によって完全にうずめられてしまったので、発掘された時に、原型がそのまま残ってしまし

た。灰を取り除いたら、居間であろうと、玄関であろうと、今日ではポルノでしか見る事のできないような絵が、どこにでもあって、ショックでした。

19節「あなたがたは、以前は自分の手足を汚れと不法の奴隷としてささげて、不法に進みましたが、今は、その手足を義の奴隷としてささげて、清潔に進みなさい」ということです。

22～23節「しかし今は、罪から解放されて神の奴隷となり、聖潔に至る実を得たのです。その行き着く所は永遠のいのちです。罪から来る報酬は死です。しかし、神の下さる賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちです。」

今までは、死に向かってこのからだが用いられていたのに、今度は永遠のいのちに向かって用いられる。

神様はあなたを愛して、あなたを救っただけでなく、あなたを愛してあなたを用いてくださる。あなたの手足を用いてくださる。それが何であろうと、神様に用いられるなんて、すごいことですよね。神様から「私はお前を必要としているのだよ」「お前の手を貸してくれ。お前の足を貸してくれ」「私はお前を使いたいんだよ」と言われるのは、それがどんな奉仕であれ、こんな光栄な事はないだろうと私は思うのです。

私の牧師は医者であったのに、牧師になった人です。彼は「私は、栄光の道を歩んでいる」と絶えず話していました。「神様にこの人生が用いられ、この私が神様に用いられる。それは栄光の道なのだ」というのが口癖でした。永遠の偉大な神、この広大な宇宙をつくった神が、私みたいな人間を用いるというのは、普通では考えられない発想だと思いますが、あなたのからだを、神にささげなさい。そうすれば、神はあなたを義の器として使ってくださいとパウロは教えているのです。

お祈り

愛する天のお父様、あなたの救いは完全です。私たちが天国に導き入れるだけではなく、この地上に生きている限り、私たちが最大限の人生、最善の人生を送れるようにしてくださいました。あなたは私たちに計画を立てて、私はあなたがたのために立てた計画をよく知っている。わざわいを与えるのではない。平安を与えるためであり、将来と希望を与えるものだ。そしてあなたがたが心を尽くして私を求めるなら、それに出あうと教えてくださいました。心から感謝をいたします。どうか耳を澄まして、神様が私たちに何をさせようとしているかを知り、それに対して夢中になったり、熱心になったりして、神様にお仕えすることができるように。奉仕の場所は教会内だけではなくありません。教会外にも、今は代々木公園で土曜日の朝、100名ほどのホームレスの人達が集まっていますが、そこで食べ物を配ったり、衣類を配ったり、そういう手足もあります。会社においても、学校においても、このからだを使って神様の栄光を現わすことができます。クリスチャンの愛、その親切を現わす場所はふんだんにありますが、どうかそれらの場所において、この手足が

用いられて、神様のお役に立つことができますように、イエス様のお名前によってお祈りいたします。アーメン